

目次 Contents

|  |    |
|--|----|
| ごあいさつ<br>Foreword  | 02 |
| 段々降りてゆく ―九州の地に根を張る7組の表現者<br>佐々木玄太郎<br>In Search of Origins : Art Practices Rooted in the Environments of Kyushu<br>SASAKI Gentaro    | 04 |
| 九州の表現者・表現活動を扱った熊本市現代美術館の主な企画展リスト<br>坂本顕子<br>List of the Past Exhibitions Featuring Art Practices in Kyushu by CAMK<br>SAKAMOTO Akiko | 12 |

## ごあいさつ

このたび熊本市現代美術館では「段々降りてゆく ―九州の地に根を張る7組の表現者」を開催いたします。熊本市現代美術館は2002年の開館以来、九州・熊本の文化の発展に貢献するため、「九州力」「ARS KUMAMOTO」「ピクニックあるいは回遊」といった地元ゆかりの作家たちに注目した展覧会を継続的に開催してきました。また小企画展示室であるギャラリーⅢにおいては、九州に関わりのある多様な領域の表現者や組織を取り上げるとともに、若手の現代作家の積極的な紹介を行い続けています。今回の「段々降りてゆく」もまた、そのような長期的な取り組みの流れの中に位置付けられるものです。本展では、九州を拠点にし、自らの生きる環境に根差した問題意識を持って主体的な活動を行う同時代の表現者7組を紹介します。タイトルの「段々降りてゆく」というのは、熊本出身の詩人・谷川雁の詩論「原点が存在する」の一節を参照したものです。このフレーズには、自らの足場を確かめながら、自身の存在の核心に迫るべく歩む出展作家たちの姿勢を象徴させています。本展では、自然環境や社会状況、またその中における個人の境遇まで、様々な背景の下に展開される表現活動を取り上げました。それらの多様な実践例を通して、九州の環境と状況に即した芸術や表現者のあり方を、来場者の皆さんとともに考えることができれば幸いです。最後になりましたが、開催にあたり、本展への参加をご快諾くださいました出展作家の皆様、心より感謝の意を表します。また貴重な作品をお貸出くださいましたご所蔵者の皆様、ならびに本展開催のためにご協力いただきました関係各位に深く御礼を申し上げます。

2021年3月  
熊本市現代美術館

## FOREWORD

It is with great pleasure that we present *In Search of Origins: Art Practices Rooted in the Environments of Kyushu*.

Since its opening in 2002, we have been contributing to the cultural development of Kyushu and Kumamoto by holding exhibitions such as *Kyushu Power*, *ARS KUMAMOTO*, and *Picnic or Excursion* that focus on artists in/from Kyushu. In addition, in Gallery III, a small exhibition room, we take up artists and cultural organizations from various fields related to Kyushu, and continue to actively introduce young contemporary artists in/from Kyushu. *In Search of Origins* is also positioned in the flow of such long-term efforts of us.

This exhibition introduces 7 individuals and groups of artists based in Kyushu who are carrying out independent activities with interests and awareness rooted in their own living environment. The title *In Search of Origins* refers to a passage from Kumamoto-born poet Tanigawa Gan's poetics "The Origin Exists" (1954). This phrase symbolizes the attitude of exhibiting artists who are trying to get to the core of their own existence while confirming their own foothold.

This exhibition features the expression activities that are developed under various backgrounds, such as the natural environment and social conditions, as well as the personal circumstances within them. Through these diverse examples of practice developed in each place, we wish to consider together with the visitors about the possible ways of art activities in response to the environments and situations of Kyushu, and the question "What kind of expressions really matter for us?"

In closing, we would like to express our heartfelt gratitude to all the exhibiting artists for their participation in the exhibition. We would also like to extend our sincere appreciation to all the owners who lent us their valuable works and to all of those who provided us with their assistance in realizing the exhibition.

March 2021  
Contemporary Art Museum, Kumamoto

[Translation: SASAKI Gentaro]

## 段々降りてゆく ―九州の地に根を張る7組の表現者

佐々木 玄太郎  
熊本市現代美術館 学芸員

### 方法としての九州

本展は、九州を拠点にし、自らの生きる環境に根差した問題意識を持って主体的な活動を行う同時代の表現者7組を紹介する展覧会である。

最初に断っておくと、本展は「九州」という括りで開催する企画ではあるが、九州の表現者全般について特定の共通性を積極的に見出そうとするものではない。当然ながら九州の中でもそれぞれの土地に固有の歴史や環境があり、表現者のあり方も様々である。県庁所在地で都市住民として生活する者もいれば、海辺に住んで塩を自作して生きる者もあり、また山奥の自営業で生計を立てる者もいる。それらはたやすく括って「九州の表現者」としての共通性を語れるものではない。それでもここで「九州」という枠を用いるのは、(いわゆるアートシーンのスタンダードを成していると思われがちな)首都圏とは別の芸術や表現者のあり方を考えるための、いわば「方法としての九州」<sup>1)</sup>のようなものだと思えていただきたい。

表現活動を行う環境として、首都圏と地方、つまり中央と非中央とでは、当然ながら諸条件に大きな差がある。中央には各種の資源が集中しており、常に大小無数の活動が行われ、世間に流れる情報の量も、中央発のものの方が非中央のそれよりも圧倒的に多いと言わざるを得ない。非中央で活動する表現者は、自身の依って立つ価値観を意識して思考しなければ、知らず知らずのうちに、中央の環境を前提に形成された価値観やシステムに引きずられてしまいがちになる。

九州には、首都圏のように多くの美術館やギャラリーやアートマーケットがあるわけではない。しかし芸術は、そのようなインフラが整った大都市の環境の中でしか生まれえないのではない。地方にはその地方ごとの芸術の存在の仕方があるはずである。そしてまた九州で生きる表現者の価値観や行動原理は、大都市に住む人々のそれに追従する必要はない。必要なのは、自らの問題意識を持ち、自身を取り巻く環境を見つめて応答していくことであり、その先にこそこの土地が独自の文化を持ち、さらに生み出し続けていく可能性があるのではないだろうか？

### 「段々降りてゆく」

本展のタイトルは、熊本出身の詩人・谷川雁の詩論「原点が存在する」の以下の一節を参照している。

1) 中国文学研究者の竹内好はかつて、「方法としてのアジア」という考え方を提示した。それは、西洋との関係を考える上では東洋の側にも独自性が必要であり、その独自性は今のところ実体としてあるわけではないが、主体形成の過程における方法として、そのような独自性をひとまず仮想してみるという発想である。(竹内好「方法としてのアジア」『日本とアジア』1993年、ちくま学芸文庫)「方法としての九州」というのは、この竹内の考え方を参考にしている。

「段々降りてゆく」よりほかないのだ。飛躍は主観的には生れない。

下部へ、下部へ、根へ、根へ、花咲かぬ処へ、暗黒のみちる所へ、  
そこに万有の母がある。存在の原点がある。初発のエネルギーがある。<sup>2)</sup>

本展では、自身の存在の核心をなしているものを掴もうと模索を続け、自らのいる状況・環境を見定めた上で、そこから自身の表現を立ち上げようとしている現代の表現者たちを取り上げている。そのような彼らの姿勢を、この「段々降りてゆく」という言葉のイメージに重ねた。それぞれの場所で展開される実践例を通して、現在の九州の環境と状況に即した芸術や表現者のあり方を考えようというのが、本展の趣旨である。

谷川雁は1950年代に上野英信、森崎和江らとともに雑誌『サークル村』を創刊して九州山口の労働者を表現でつなげることを試み、筑豊の大正炭鉱での労働争議の現場にも深く関わり闘った思想家・運動家として知られている。その「東京へゆくな ふるさとを創れ」<sup>3)</sup>、「連帯を求めて孤立を恐れず」<sup>4)</sup>といった印象的なフレーズの数々は、後の時代に至るまで、運動家や芸術家を含め多くの人々を奮い立たせてきた。

「原点が存在する」において谷川は、詩人という存在について以下のように述べている。

——まだ決定的な姿をとらず不確定ではあるが、やがて人々の前に巨大な力となってあらわれ、その軌道にひとりびとりを微妙にもとらえ、いつかその人の本質そのものと化してしまう根源的勢力……花々や枝や葉を規定する最初のそして最後のエネルギー……をその出現に先んじて、その萌芽、その胎児のうちに人々をして知覚せしめ、これに対処すべき心情の基礎を与える人間ではないか。やがて支配的となるにちがいない新しい心情の発見者、それが詩人だ。<sup>5)</sup>

これは詩人のみならず、芸術家一般についての説明として読み換えることも可能だろう。またここで言われる「原点」とは、社会の下層とされるような民衆との親密な接触を通して谷川が見出した観念であり、「現代の基本的テーマが発酵し発芽する暗く温かい深部」<sup>6)</sup>であり、また「新しい諸力誕生の起点」<sup>7)</sup>ともなるものとして語られている。

本展自体は、谷川の思想に逐一沿って展開しようとするわけではないが、彼が阿蘇の結核病棟での生活を背景にして記したこの詩論(詩人論)は、表現者のあり方について時代を超えて示唆を与えてくれる。

谷川とその周辺にも接点を持った福岡の前衛美術集団の九州派はかつて、三池争議等

2) 谷川雁「原点が存在する」(『母音』第18冊、1954年)

3) 谷川雁「東京へゆくな」(『大地の商人』1954年、母音社)

4) 全共闘運動の中で掲げられたスローガンとして知られるが、その原典は谷川の「工作者の死体に萌えるもの」(『文学』1958年6月、岩波書店)の中の「そして今日、連帯を求めて孤立を恐れぬメディアたちの会話があるならば、……」という一節。

5) 6) 谷川雁「原点が存在する」

7) 谷川雁「農村と詩」(『講座現代詩』Ⅲ、1957年、飯塚書店)

の労働運動にもシンパシーを持ちつつ、アスファルトのような象徴的素材に自分たちのリアリティーを託しながら、地方の生活者としての視点や民衆のエネルギーをその作品に結びつけることを試みた。その姿勢は「今日の大地の自らの足もとの深部を画け！」<sup>8</sup>という谷川の煽動に応じたもののように見える。

またその九州派の主要メンバーの一人であった菊畑茂久馬は、同グループが主な活動を終えた後、1960年代後半からは本格的な作品発表を控え、20年近くに及ぶいわゆる「沈黙の時代」に入った。そして太平洋戦争時に描かれた藤田嗣治らの戦争画や、筑豊の山本作兵衛が描く炭坑記録画といった、当時の非主流の作品群と向き合うことに注力した。<sup>9</sup>それは後に再開される菊畑自身の絵画制作にとっても必要不可欠な、「自己の表現の足場を問うため」<sup>10</sup>の深く長い潜行だった。

また「原点」へ向かって歩み続けたという意味では、熊本の先人でいえば、従軍体験において脳裏に焼き付けられた造形や人間観を創造の源泉としながら、風刺とユーモアをもって現代の人間像を掘り下げ続けていった浜田知明のような作家を思い起こすこともできるだろう。

中央のメジャーなアートシーンから距離を取りつつ、独自の立場で大きな足跡を残したのち、浜田は2018年に、菊畑は2020年にそれぞれこの世を去った。

では現在この地で生きる表現者たちは、どのような形で自らの足場を見つめているだろうか？ 本展はその一端を提示することを目指す。

## 環境への自覚と応答

本展の出展作家それぞれの具体的な背景や活動については個別の解説で紹介しているため、ここで一人一人を取り上げていくことはしない。しかし共通して言えることは、自身が今いる場所の環境を盲目的に肯定して受け入れるのではなく、他の場所との差異を認識した上で、そこに自分なりの意義づけをし、ある種の覚悟を持ってその場に生きているということだ。そして一般的な（都会式の）作家像や活動形式にとらわれず、それぞれの場に即した形で展開を試みている。

表現活動を継続していく上で、生活コストの相対的な低さや空間の得やすさなどは地方の基本的な利点として捉えられる。一方で、たとえば地方における発表の機会やオーディエンスの少なさなどは、表現活動を行う環境としてはしばしば大きな課題となることも事実だ。

本展の出展作家のある者は、自分で発表の場を設けてそこに幅広い人々を呼び込むことを試みる。またある者は日常空間の中で表現を行い、ときには道ゆく人々から目を留められ、ときには無視され、ときには思わぬ反応を引き出したりしている。また中には自身が住む場所の状況そのものを変えていくことを試みる者もいる。

文化的な刺激や交流の機会の少なさをどう考えるかも、地方で表現を続けていく上で向き合わざるを得ない問題の一つとしてある。通信技術の進歩によって情報の行き来が高速化・活発化しているとはいえ、周囲にはそもそも関心や問題意識を共有できる人間が絶対的に少ない、というのは地方で活動する人々がしばしば口にするところである。

そのような状況にあって、ある者は刺激を求めて外部から人を呼び込み、ある者は自身を外に踏み出していく。さらには、その場所にいる関心の異なる人々へとアプローチをしながらまずは何かを始めてしまうことで、共有点を新たに作り出していくといった展開を見せる者もいる。

そのような各地各様の試みの中に、独創性や固有性が生まれることも少なくない。

また直接触れることのできる外部からの刺激の量は限られていても、しかるべき視点を持つてば、身近なものの中に、書物の中に、土地固有の環境や歴史の中に、向き合うべきものは実は無数にある。本展の出展作家たちは「他の誰か」が作った基準ではなく、ここで生きる自身にとって切実な表現とは何かを問い続けながら活動を行っている。

彼らの多くは70-80年代生まれで、若手や中堅と呼ばれる年齢だ。各作家が行っているそれぞれの試みも多くはまだ模索の段階にあり、今まさに「自己の表現の足場」を見つめ直そうと格闘している者もいる。谷川雁も述べているように、「直ちに原点に立とうとあせるべきではない」<sup>11</sup>。彼らの地道な試みが「足下の大地」に深く根を張ったのち、そこに太い幹が立ち上がっていくことを期待したい。

8) 谷川雁「原点が存在する」

9) なお菊畑の以下の代表的な戦争画論と山本作兵衛論は、熊本の渡辺京二、石牟礼道子、松浦豊敏らが編集していた雑誌『暗河』で発表された。

菊畑茂久馬「フジタと眠れ 絵描きと戦争」（『暗河』6号1975年、葦書房）

菊畑茂久馬「川筋画狂人 山本作兵衛の絵」（『暗河』9号1975年、葦書房）

10) 野中明「菊畑茂久馬―「絵画」へと至る道」（『菊畑茂久馬―「絵画」へと至る道』展解説論文、2020年、長崎県美術館）

11) 谷川雁「原点が存在する」

## In Search of Origins :

### Art Practices Rooted in the Environments of Kyushu

SASAKI Gentarō

Contemporary Art Museum, Kumamoto, Curator

#### Kyushu as Method

This exhibition introduces seven individuals and groups of contemporary artists who are based in Kyushu, and are independently engaged in their own art practices while having an awareness of issues rooted in their own living environment.

To clarify at the outset, although this exhibition is organized with a specific focus on “Kyushu,” it does not actively seek to find a specific commonality among all artists of this region. Naturally, each area of Kyushu has its own history and environment, and artists too, are varied and diverse. Some live as urban residents in the prefectural capital, others live by the ocean and make their own salt, while there are those who make a living by being self-employed in the mountains. Their lives and work cannot simply be summarized and discussed under a common thread by grouping them into “artists of Kyushu.” Nevertheless, one hopes that the use of “Kyushu” as a framework here is understood, so to speak, as a “method” for thinking about ways of art and artists that distinguish themselves from those of the capital and its surrounding area (which are often regarded as the standard of the so-called art scene). In other words, what is intended is “Kyushu as method.”<sup>\*1</sup>

As environments for engaging in artistic activities, there are of course significant differences in terms and conditions between the metropolitan area and rural areas, that is, between central and non-central areas. Various resources are concentrated in the center, and countless activities both large and small, are constantly being carried out. One also cannot help but say that in terms of information that is transmitted to society, an overwhelmingly large amount originates in central areas rather than non-central areas. Artists who work in the non-center tend to be unknowingly influenced by the values and systems formed on the premise of the central environment unless they think about their own values upon which they stand.

In Kyushu there are not as many museums, galleries and art markets as the metropolitan area. However, art practices do not only emerge in the environments of large cities where such infrastructures are in place. There are undoubtedly various possible ways of art in each region. And again, the values and principles of artists living in Kyushu do not have to follow those of people living in big cities. What is necessary is to be aware of our own issues, to turn our eyes to the environment that surrounds us, and respond to it. Through such efforts lies the possibility for Kyushu to establish its own culture, and continue creating and developing it further towards the future.

#### “In Search of Origins”

The title of this exhibition refers to the following passage in “The Origin Exists,” the poetics of Tanigawa Gan, a poet from Kumamoto.

*All we can do is “go down gradually.” Leaps are not subjectively born. To the bottom, to the bottom, to the roots, to the roots, to the place where flowers do not bloom, to the darkness, there is the mother of all things. There is the origin of existence. There is the incipient energy.”<sup>\*2</sup>*

This exhibition features artists who continuously seek to grasp what lies at the core of their existence, and try to gain deep insight into their environments and situations, from which they develop and launch their own various practices. Their approach and attitude is reflected in the title “In Search of Origins.” Through the art practices developed by these artists in their respective places, we wish to consider the possible ways of art and artistic practice in response to the environments and situations of Kyushu.

Tanigawa Gan launched the magazine *Circle Village* with Ueno Eishin, Morisaki Kazue and others in the 1950s in an attempt to connect workers in Yamaguchi and Kyushu through acts of expression, and is also recognized as a thinker and activist who was deeply involved in the labor dispute at the Taisho coal mine in Chikuhō. His numerous impressionable phrases such as “Don’t go to Tokyo, create your home”<sup>\*3</sup>, “Be not afraid of isolation while in search for solidarity”<sup>\*4</sup>, have inspired many people, including activists and artists, for generations to come.

In “The Origin Exists,” Tanigawa describes the figure of the poet as follows.

*There is a fundamental force, which although uncertain and yet to take on a definitive presence, soon comes to emerge as a colossal force before people’s eyes, and subtly captures each person in their path and eventually becomes the very essence of who they are..... it is the first and last energy that define flowers, branches and leaves..... prior to its emergence the poet enables people to sense it in its sprout and its foetation, and they are the discoverers of feelings that respond to the force”<sup>\*5</sup>*

This can be regarded as an explanation not only true for poets, but also for artists in general.

In addition, the term “origin” as is referred to here, is a concept that Tanigawa had discovered through his intimate contact with people who are considered as belonging to the lower layers of society. It is described as “the dark and warm depths where fundamental themes of our times are fermented and germinate”<sup>\*6</sup>, and “the starting point for the birth of various new forces.”<sup>\*7</sup>

\*1. Takeuchi Yoshimi, a cultural critic and researcher of Chinese literature, had presented the concept of “Asia as Method.” He advocated that in considering its relationship with the West, it was necessary for the East to have a sense of individuality. While this individuality has no substance as of present, the idea is to imagine such individuality for the time being as a method in the process of subject formation. (Takeuchi Yoshimi, “Asia as Method” (*Japan and Asia*, 1993, Chikuma Bungei Bunko)  
“Kyushu as Method” is based on this idea of Takeuchi.

\*2. Tanigawa Gan, “The Origin Exists” (*Bo-in*, vol. 18, 1954)

\*3. Tanigawa Gan, “Don’t go to Tokyo” (*The Merchant of the Earth*, 1954)

\*4. This is known as the slogan that was used in the campaigns of the *Zenkyoto* (All Campus Joint Struggle Committee). The phrase was originally published in Tanigawa’s text “That which sprouts from the corpse of a maneuverer” (*Bungaku*, June 1958) and reads, “And today, should there be conversations between media that are not afraid of isolation while in search for solidarity...”

\*5.\*6. Tanigawa Gan, “The Origin Exists”

\*7. Tanigawa Gan, “Villages and Poetry” (*Lecture Series: Contemporary Poetry III*, 1957)

This exhibition itself does not try to present itself in line with Tanigawa's ideas, yet his poetics (theory on the figure of the poet), which he had written against the backdrop of his life recovering from tuberculosis in a hospital ward in Aso, presents us with timeless suggestions as to who and what the artist should be.

*Kyushu-ha*, an avant-garde art group in Fukuoka, which also came into contact with Tanigawa and his surroundings, while being sympathetic of labor movements such as the Miike Struggle, and expressing their reality by symbolic materials like asphalt, attempted to connect their perspective as local citizens and the energy of the masses to their work. Their attitude indeed seems to resonate with Tanigawa's incitement to, "depict the depths of what lies beneath the earth on which one stands today!"<sup>\*8</sup>

Furthermore, Kikuhata Mokuma, who was one of the key members of *Kyushu-ha*, from the latter half of the 1960s, after the group had ended its main activities, entered a so-called "period of silence" which lasted for nearly 20 years, and refrained from publicly presenting his work in exhibitions. During this time, he focused on engaging with works that were considered non-mainstream at the time, such as war paintings by Foujita Tsuguharu during WWII, and paintings by Yamamoto Sakubei that documented the Chikuhō coalmines.<sup>\*9</sup> It was a deep and long dive "to question the foothold of his own expression,"<sup>\*10</sup> which was highly essential for his painterly practice that he would come to subsequently resume.

Also, as a predecessor of Kumamoto who constantly sought to venture towards their "origins," those that come to mind are artists like Hamada Chimei. Hamada continued to explore the image of the modern human being through satire and humor, employing imagery as well as his view of human nature that were engraved into his mind during his military experience, as the source of his creation.

Hamada and Kikuhata passed away in 2018 and 2020 respectively, having left their own significant mark while keeping a distance from the major art scene in the center.

How are artists living here and now, looking at their foothold? This exhibition aims to shed light on their various efforts and endeavors.

### Awareness and Response to the Environments

The specific background and activities of each participating artist are introduced in their respective commentaries, and therefore one will not go into individual detail here. However, what can be said for all of these artists is that instead of blindly affirming and accepting the environment of the place in which they find themselves, they introduce their own meaning while recognizing what makes it different from other places, and thus continue to live there

with a certain determination of sorts. What is more, they attempt to develop their practices in ways that correspond to their circumstances rather than feeling the need to adhere to the general (urban) image of the artist and forms of activity.

The relative low cost of living and spaces can be regarded as a basic advantage of small cities and rural areas in continuing to engage in art activities. Having said that, on the other hand for example, fewer opportunities for presentation and the smaller number of audiences in such cities and areas are often major issues for an environment in which to carry out artistic practices.

Some of the artists in this exhibition set up their own places and platforms for presentation, and attempt to attract a wide range of people to come and view their work. Others create and present works in everyday space, at times being noticed by passersby, sometimes being ignored, and at times eliciting unexpected reactions. There are also those who try to change the very circumstances of the place in which they live.

How to think about the lack of cultural stimuli and opportunities for interaction is one of the issues that must be confronted in order to continue engaging in artistic practices in small cities and rural areas. Although the exchange of information is accelerating and becoming more active due to advances in communication technology, one often hears from people working in rural areas that there are absolutely few people around them with which they can share their interests and awareness of issues. In such a situation, some invite people in from the outside in search of inspiration, and some venture out by themselves. In addition, some people show developments such as creating new points in common through going ahead and starting something by approaching people with different interests who are present in that place.

Originality and uniqueness of activities are often born in such attempts by each region.

Furthermore, even though the amount of inspiration from the outside that one can directly come into contact with is limited, with the broad perspective it is possible to notice that there are in fact countless subjects that should be confronted within things that are familiar, in books, in the environment, and the distinct history of each region. The artists featured in this exhibition continue to question forms and means of expression that are relevant to themselves living here in Kyushu, as opposed to standards created by "someone else."

Many of these artists were born in the 1970s and 1980s and could be regarded as belonging to the young or mid-career generation of artists. The majority of the attempts made by each artist are still in the exploration stage, and some are struggling to reconsider the "foothold" for their own expression. As Tanigawa Gan also stated, "one must not rush to try and stand at the origin right away."<sup>\*11</sup> One hopes that once their steady efforts have taken root deeply in the "land beneath their feet," a thick stem will sprout and continue to grow forth.

\*8. Tanigawa Gan, "The Origin Exists"

\*9. Kikuhata's representative essays on war paintings and writings on the works of Yamamoto Sakubei were published in the magazine *Kuragou*, edited by Watanabe Kyoji, Ishimure Michiko, Matsuura Toyotoshi in Kumamoto. Kikuhata Mokuma, "May Foujita be Put to Rest: A Painter and the War" (*Kuragou*, June 1975 issue) Kikuhata Mokuma, "Kawasuji crazy painter: The Paintings of Yamamoto Sakubei" (*Kuragou*, September 1975 issue)

\*10. Nonaka Akira, "Mokuma KIKUHATA: A Path to the Painting" (*Mokuma KIKUHATA: A Path to the Painting* exhibition essay, Nagasaki Prefectural Art Museum, 2020)

\*11. Tanigawa Gan, "The Origin Exists"

## 九州の表現者・表現活動を扱った熊本市現代美術館の主な企画展リスト

坂本 顕子

熊本市現代美術館 教育事業班主査／学芸員

ギャラリーI・II

| [ 展覧会名 ]                                    | [ 会期 ]                                     | [ 九州ゆかりの出演作家など ]  |
|---|--|---|
| 熊本国際美術展 ATTITUDE 2002<br>心の中の、たったひとつの真実のために | 02.10.12 - 02.12.08                        | 岡山直之、伊藤隆哉、藤岡祐機、渡邊義統、大原美子、菊畑茂久馬、遠藤邦江   |
| 井手宣通の世界展                                    | 02.12.21 - 03.02.02                        |   |
| 九州力<br>世界美術としての九州                           | 03.02.15 - 03.04.06                        | 黒田清輝、藤島武二、岡田三郎助、和田英作、青木繁、坂本繁二郎、山本作兵衛、児島善三郎、古賀春江、中村研一、東郷青児、田代順七、牛島憲之、山口長男、海老原喜之助、野田英夫、宇治山哲平、千賀友子、瑛九、坂本善三、古沢岩美、井手宣通、大塚耕二、織田廣喜、坂田憲雄、三浦洋一、浜田知明、久永強、野見山暁治、田淵安一、マナブ間部、宮崎静夫、池田龍雄、桜井孝身、宮崎準之助、吉村益信、田部光子、春日光義、秀島由己男、菊畑茂久馬、風倉匠、森山裕之、河津敏、野田哲也、立石大河亞、成田克彦、塩田武史、倉重光則、葉祥明、小野田維、名嘉睦隆、小山佐敏、林浩、柳幸典、藤浩志+mmシスターズ、高嶺格  |
| OPEN SKY 八谷和彦展 ポストペットからメーヴェまで               | 03.04.19 - 03.06.22                        |   |
| 生人形と松本喜三郎 反近代の逆襲                            | 04.06.05 - 04.08.15                        | 造りもの、松本喜三郎、安本亀八、江島栄次郎   |
| 海老原喜之助生誕100年祭展 画家再生                         | 04.08.28 - 04.10.31                        |   |
| 熊本の華人展                                      | 04.12.03 - 04.12.05<br>04.12.10 - 04.12.12 |   |
| CAMKコレクションI キュレーターズ・セレクション                  | 04.12.23 - 05.01.16                        |   |
| 横尾忠則 ー 熊本・ブエノスアイレス化計画                       | 05.01.29 - 05.04.17                        | *熊本を舞台に新作制作   |
| 宮島達男「死の三部作」                                 | 05.07.23 - 05.10.23                        | *熊本を舞台に新作制作   |
| 熊本の華人展 vol.2                                | 05.11.04 - 05.11.06<br>05.11.11 - 05.11.13 |   |
| CAMKコレクションvol.2 ハッピー・ホーム                    | 05.12.23 - 06.02.12                        |   |
| アン・ハミルトン [ヴォーチェ]                            | 06.02.25 - 06.06.04                        | *熊本を舞台に新作制作   |
| 反近代の逆襲II 生人形と江戸の欲望展                         | 06.06.24 - 06.10.22                        | 松本喜三郎、安本亀八、日田の山鉦  |
| 熊本の華人展 vol.3                                | 06.12.01 - 06.12.03<br>06.12.06 - 06.12.08 |   |
| ARS KUMAMOTO                                | 06.12.23 - 07.03.04                        | 田中春弥、田口瑠、宮崎静夫、段村一美、江田豊、下田梯三郎、測田安子、春日光義、秀島由己男、岩永忠樹、二子石義之、宮本明、鎌田勝美、木戸征郎、田代兎三、大津英敏、牛島義弘、小村啓治、瀬川高紀男、上村隆一、有田巧、蔵嶋洋一朗、石山義秀、小山佐敏、伊東浩一、田中均、熊谷有展、鹿見喜陌、松崎良太、中村賢次、野田哲也、浜田知明、中嶋一雄、市村緑郎、石原昌一、本田貴侶、山本幸一、鷹尾俊一、竹田康宏、勝野真言、高瀬英俊、水上嘉久、宮崎珠太郎、白木光虎、井上泰秋、高津明美、島田清美、山口耕三、久保田保義、小川哲男、松木良介、友枝雄策、岩上孝二、鶴田一郎、西村一也、花田峰堂、安永春英、兼城昌山、森山溪草、吉岡功治、田中栄一、長野良市、村上タカシ、蔵野由紀子、小林まみ、佐藤和歌子、千々岩修、二宮弘一、野田竜太郎、林典子、藤田ひろぶみ |

|  |  |   |
|--|--|---|
| 熊本国際美術展 ATTITUDE 2007<br>人間の家 真に歓喜に値するもの   | 07.07.21 - 07.10.14                        | 石田遼夫、中山節夫   |
| 熊本の華人展 vol.4                               | 07.11.23 - 07.11.25<br>07.11.30 - 07.12.02 |   |
| 日比野克彦 HIGO BY HIBINO                       | 07.12.15 - 08.04.06                        | *熊本を舞台に新作制作   |
| ピクニックあるいは回遊                                | 08.04.19 - 08.07.06                        | 横山裕一、角孝政、宮井正樹、田中みぎわ、活永剛、真珠子、村井美々、瀧下和之、名護朝和、ミヤザキケンスケ、倉山裕昭、塔本シスコ、鈴木淳、篠塚聖哉、梅田哲也、武内貴子、森淳一、西野正将、田尻幸子 |
| メモリアーまなざしの軌跡                               | 08.07.19 - 08.10.19                        | 新興熊本大博覧会、千々岩修   |
| 荒木経惟 熊本ララバイ                                | 08.11.01 - 09.02.15                        | *熊本を舞台に新作制作   |
| 熊本の華人展 vol.5                               | 09.03.20 - 09.03.22<br>09.03.27 - 09.03.29 |   |
| 井上雄彦 最後のマンガ展 重版・熊本版                        | 09.04.11 - 09.06.14                        |   |
| 九州ゆかりの日本画家たち                               | 09.10.10 - 09.12.06                        | 堅山南風、福田平八郎、田中一村、高山辰雄、中根宏、大塚浩平、加来万周、川口恵、木村みな、佐藤和歌子、徳留永子、比佐水音、山下孝治、山本太郎                           |
| 知られざる日赤の歴史展 すべては熊本からはじまった                  | 09.12.19 - 10.02.14                        |   |
| CAMKコレクション vol.3<br>メリー・ゴー・ラウンド 煌めきと黄昏     | 09.12.19 - 10.02.14                        |   |
| 熊本の華人展 vol.6                               | 10.03.20 - 10.03.22<br>10.03.26 - 10.03.28 |   |
| 祝祭と祈りのテキスタイル<br>江戸の職旗から現代のアートへ             | 10.04.10 - 10.06.13                        | 熊本のテキスタイル<br>(大漁旗、ドンザ、平油単、節句轆、定式幕)  |
| へるんさんの秘めごと                                 | 10.06.26 - 10.09.05                        | 秀島由己男、高嶺格、野村佐紀子、鈴木淳   |
| 光の絵画 vol.3 祈りの風景                           | 10.12.11 - 11.02.13                        |   |
| 熊本の華人展 vol.7                               | 11.03.19 - 11.03.21<br>11.03.25 - 11.03.27 |   |
| 水・火・大地 創造の源を求めて                            | 11.04.09 - 11.06.12                        | 浅井裕介  |
| 熊本の華人展 vol.8                               | 12.03.16 - 12.03.18<br>12.03.23 - 12.03.25 |   |
| 葉祥明展 地平線の彼方へ                               | 12.04.07 - 11.06.17                        |   |
| 熊本の華人展 vol.9                               | 13.04.27 - 13.04.29<br>13.05.03 - 13.05.05 |   |
| CAMKコレクション vol.4 来た、見た、クマモト!               | 13.05.29 - 13.06.23                        |   |
| 水戸岡鋭治からのプレゼント<br>まちと人を幸福にするデザイン            | 14.06.28 - 14.09.15                        |   |
| 熊本の華人展 vol.10                              | 15.03.13 - 15.03.15<br>15.03.20 - 15.03.22 |   |
| 川内倫子展 川が私を受け入れてくれた                         | 16.01.23 - 16.03.27                        | *熊本を舞台に新作制作   |
| CAMKコレクション展 vol.5<br>知っとるね?くまもとのお宝、大公開てばい! | 17.02.18 - 17.03.26                        |   |

| [ 展覧会名 ]                                    | [ 会期 ]              | [ 九州ゆかりの出演作家など ]  |
|---|---------------------|---|
| 誉のくまもと展                                     | 17.09.16 - 17.11.26 | 稲原豊命、今田淳子、江島栄次郎、大串誠寿、鈴木淳、瀧下和之、長尾紀壽、秀島由己男、深浦春・小川マス・中島千壽、安本亀八 |
| 熊本城×特撮美術 天守再現プロジェクト展                        | 17.12.16 - 18.03.18 | 三池敏夫  |
| 渚・臉・カーテン チェルフィッチュの〈映像演劇〉                    | 18.04.28 - 18.06.17 |   |
| CAMKコレクション展 vol.6<br>きっかけは「彫刻」。現代日本の彫刻と立体造形 | 19.09.21 - 19.11.24 |   |
| ライブ<br>生きることは、表現すること                        | 20.04.11 - 20.06.14 | 藤岡祐機、渡邊義紘、松本寛康、大山清長、木下今朝義、森繁美、西本喜美子、坂口恭平                    |
| MINIATURE LIFE展2 田中達也 見立ての世界                | 21.01.29 - 21.03.14 |   |
| 段々降りてゆく<br>九州の地に根を張る7組の表現者                  | 21.03.27 - 21.06.13 | 加藤笑平、すうひゃん、畑直幸、オレクトロニカ、宮本華子、HOTEL ASIA PROJECT、山内光枝         |

熊本市現代美術館のメインギャラリーにあたるギャラリーI・IIでは、2002年の開館からこれまでに95本の企画展を実施してきた\*。田中幸人館長（2002-2004）、南嶋宏館長（2004-2008）の在任時は、①現代の世界と日本の美術を通し、人間のありようを検証する美術館 ②「衣食住」の視点から、芸術表現を考える美術館 ③熊本、そして九州に根を下ろして表現活動を続ける芸術活動を応援する美術館 という3つの基本理念が掲げられた。この時期の企画展は、国際展と並び、井手宣通や海老原喜之助などの地元ゆかりの作家の個展、「九州力」展や「ARS KUMAMOTO」展等、九州・熊本の作家を広く紹介するグループ展が行われた。同時に、横尾忠則や宮島達男、アン・ハミルトン、日比野克彦、荒木経惟らの個展に際しては、熊本での新作制作実施にも取り組み、その成果が作品収蔵へとつながっていった。また生人形や菊池恵楓園絵画クラブ、いけばな等の地元根差した多様な表現にも着目し、企画が行われた。

桜井武館長（2008-2019）の在任時は、①アートの力を見せる一着きつける、変える ②アートへの愛情を育てる、根づく土壌をつくる ③アートが人をつなぎ、アートで都市をデザインする という3つの基本理念が定められた。この時期の企画展は、桜井が特に関心を寄せていたファッションやテキスタイルを始め、写真やデザイン、アニメーション、特撮など、より幅広いジャンルの企画に取組むようになった。桜井の在任期間中、熊本地震のあった2016年を除き、入館者数は年間20万人以上を堅守した。また学芸員の自主企画展が増加したこととあわせて、行政や街なかなど、様々な地元団体との協働プロジェクトを行うようになったのも、この時期の特徴である。

\*2002年10月12日～2021年3月31日までの期間

### ギャラリーIII 2021年3月までに開催してきた全ての企画展を列記

| [ 展覧会名 ]                               | [ 会期 ]              | [ 出演作家など ]  |
|--|---------------------|---|
| 収蔵作品より 熊本の作家                           | 03.02.05 - 03.03.24 |   |
| グラフィックマン                               | 03.03.26 - 03.04.13 | 坂口健次、城仁田信己、マツダヒロチカ、松石博幸、武永茂久、廣瀬一男、大田真大朗、平井直樹、松永壮、吉本清隆、かいこうじ、荒木健 |
| 仏山輝美展                                  | 03.04.16 - 03.05.25 |   |
| 坂田憲雄追悼展                                | 03.05.31 - 03.07.28 |   |
| 光の絵画 菊池恵楓園絵画クラブ展                       | 03.07.30 - 03.08.31 |   |
| 黒木重雄展                                  | 03.09.03 - 03.10.05 |   |
| 子どもとともに 新聞・出版の歴史展                      | 03.10.08 - 03.10.19 |   |
| 兼城昌山展 書のひびき                            | 03.10.22 - 03.11.30 |   |
| 瀧下和之「桃太郎図」展                            | 03.12.03 - 03.12.28 |   |
| 新春をいける 熊本の華人21流派60人展                   | 04.01.04 - 04.01.19 |   |
| 星加民雄・動きの錯視展 ふるえる壁                      | 04.01.21 - 04.02.22 |   |
| 林浩展 decrescent                         | 04.02.25 - 04.03.28 |   |
| 中島千波「一心行の桜」展                           | 04.03.31 - 04.04.25 |   |
| 熊本の作家2 中根宏                             | 04.04.28 - 04.05.23 |   |
| 百々亀利雄 球面&水面スクリーンの実験映像展                 | 04.05.26 - 04.06.27 |   |
| 小説家 福島次郎絵画展                            | 04.06.30 - 04.07.25 |   |
| 松永壮写真展 [ポートグラフ]                        | 04.07.28 - 04.08.29 |   |
| 青春の「山脈」展                               | 04.09.01 - 04.09.26 |   |
| 「市政だよりくまもと」を飾った熊本の風景<br>池永久美子・片島荷風ふたり展 | 04.09.29 - 04.10.31 |   |
| いつもここから — 悲しいとき — 展                    | 04.11.03 - 04.11.14 |   |
| くまもとアートボリス展<br>建築の可能性とくまもとアートボリスの今後の展開 | 04.11.17 - 04.11.29 |   |
| SUPPOSED TO FLY 阿部守                    | 04.12.01 - 04.12.26 |   |
| 盆栽という名の宇宙 日本盆栽協会熊本支部名品展                | 05.01.15 - 05.01.23 |   |
| 新たなる具象絵画の創造<br>井手宣通・坂田憲雄・赤星宣利          | 05.01.26 - 05.02.27 |   |
| シルバー作品文化祭                              | 05.03.05 - 05.03.27 |   |
| 宮崎昭吾追悼展                                | 05.03.30 - 05.04.24 |   |
| 熊本の作家3 田代順七展                           | 05.04.27 - 05.05.29 |   |
| 浜田知明新作彫刻展 2000-2004                    | 05.06.06 - 05.07.03 |   |

| [ 展覧会名 ]                              | [ 会期 ]              | [ 九州ゆかりの出演作家など ] |
|---------------------------------------|---------------------|------------------|
| 「熊本の写真家」シリーズ第1弾<br>坂本徹・川畑雅弘・緒方弘之「3人展」 | 05.07.06 - 05.07.31 |                  |
| セルパンの庭                                | 05.08.03 - 05.09.04 |                  |
| 光の絵画 Vol.2 菊池恵楓園絵画クラブ作品展              | 05.09.09 - 05.10.02 |                  |
| 熊本日日新聞社報道写真展<br>眼の証言 ― 終戦から今日まで       | 05.10.05 - 05.10.30 |                  |
| 盆栽という名の宇宙 vol.2<br>日本盆栽協会熊本支部銘品展      | 05.11.03 - 05.11.06 |                  |
| 熊本の作家4 宇野千里展                          | 05.11.09 - 05.11.27 |                  |
| 友枝雄策30年展                              | 05.11.30 - 05.12.25 |                  |
| 井手宣通展 人と自然を中心に                        | 06.01.04 - 06.02.26 |                  |
| 第11回 熊本市シルバー文化作品展                     | 06.03.04 - 06.03.26 |                  |
| naonao's こんな二人、(こなふたりてん)              | 06.03.29 - 06.05.28 | 吉原尚子、森川尚美        |
| 森山淡草展                                 | 06.05.31 - 06.07.30 |                  |
| 真珠子展 Ready for Lady                   | 06.08.02 - 06.10.01 |                  |
| 盆栽という名の宇宙 vol.3<br>日本盆栽協会熊本支部銘品展      | 06.10.05 - 06.10.09 |                  |
| 「熊本の写真家」シリーズ第2弾<br>光と感情 ― 10人の視覚―     | 06.10.11 - 06.11.19 |                  |
| ゆびさきからはじまる 点字絵本の世界展                   | 06.11.22 - 07.01.08 |                  |
| 熊本の作家5 川上尉平展                          | 07.01.10 - 07.02.25 |                  |
| 第12回 熊本市シルバー文化作品展                     | 07.03.03 - 07.03.25 |                  |
| 湖田安子展 『絵画』を巡る闘争!                      | 07.03.28 - 07.05.27 |                  |
| 元田久治展                                 | 07.05.30 - 07.07.29 |                  |
| 古場田博 二本木「遊郭」展<br>絵巻物・絵画・人形で遊郭を回る      | 07.08.01 - 07.09.24 |                  |
| 描かれた熊本城 近世城下図にみる熊本                    | 07.09.26 - 07.11.18 |                  |
| 盆栽という名の宇宙 vol.4<br>日本盆栽協会熊本支部銘品展      | 07.11.22 - 07.11.26 |                  |
| 熊本の作家6 海老原喜之助と坂本善三<br>熊本とバリを胸に抱いて     | 07.11.28 - 08.01.13 |                  |
| gaju ありがとうのあしあと                       | 08.01.16 - 08.03.02 |                  |
| 第13回 熊本市シルバー文化作品展                     | 08.03.08 - 08.03.23 |                  |
| 熊本市収蔵作品選 中島千波、千住博、森山淡草                | 08.03.26 - 08.04.06 |                  |
| 「ピクニックあるいは回遊」展 第2会場                   | 08.04.19 - 08.07.06 | 篠塚聖哉、武内貴子、森淳一    |

|   |                     |                                  |
|---|---------------------|----------------------------------|
| 映画看板師 田上賢二展   | 08.07.16 - 08.08.31 |                                  |
| 現代の書 三嶋天鴻・徳田翠雨・緒方龍生 三人展                             | 08.09.03 - 08.10.26 |                                  |
| 盆栽という名の宇宙 vol.5<br>日本盆栽協会熊本支部銘品展                    | 08.10.30 - 08.11.03 |                                  |
| Party9 Happy!×Happy!!×Happy!!!展                     | 08.11.05 - 09.01.12 | 熊本イラストレーターズクラブ                   |
| 熊本市現代美術館収蔵作品展 映像スペシャル:歌!                            | 09.01.14 - 09.02.15 |                                  |
| 第29回熊本市造形展  | 09.02.19 - 09.03.01 |                                  |
| 第14回 熊本市シルバー文化作品展                                   | 09.03.07 - 09.03.22 |                                  |
| 今田淳子展   | 09.06.20 - 09.08.02 |                                  |
| 熊本映画館覚え書<br>あの頃映画は「たからもの」だった                        | 09.08.05 - 09.10.04 |                                  |
| 盆栽という名の宇宙 vol.6<br>日本盆栽協会熊本支部銘品展                    | 09.10.08 - 09.10.12 |                                  |
| 熊本市制120周年記念 熊本市名誉市民展                                | 09.10.17 - 09.11.01 |                                  |
| 坂口恭平 熊本0円ハウス  | 09.11.07 - 09.12.13 |                                  |
| 熊本市収蔵作品展 CAMKコレクション vol.3<br>「メリー・ゴー・ラウンド ― 煌めきと黄昏」 | 09.12.19 - 10.03.01 |                                  |
| 第15回 熊本市シルバー文化作品展                                   | 10.03.06 - 10.03.21 |                                  |
| 平川なつみ デジャヴュな日常                                      | 10.04.01 - 10.05.30 |                                  |
| 山鹿灯籠 生きた和紙のかたち                                      | 10.06.02 - 10.07.25 |                                  |
| 熊本アーティスト・インデックス                                     | 10.07.31 - 10.09.12 | arthorymen、加藤笑平、櫻井栄一、ワタドリ計画、竹之下亮 |
| アジアン・アート・コレクション                                     | 10.09.18 - 10.11.14 |                                  |
| 電気館 100年の歴史   | 10.11.17 - 11.01.10 |                                  |
| 春の足もと 熊本市現代美術館コレクションより                              | 11.01.12 - 11.02.28 |                                  |
| 肥後★てぬぐい展  | 11.03.02 - 11.04.03 | 熊本イラストレーターズクラブ                   |
| 稲原豊命 写真展 サイクル ― 環の江津湖                               | 11.04.06 - 11.05.08 |                                  |
| 坂本善三展 バブリックアートから見た坂本善三                              | 11.05.14 - 11.07.18 |                                  |
| トーチカ ReBuild / PIKA PIKA IN KUMAMOTO                | 11.07.23 - 11.09.11 |                                  |
| 長尾紀壽 型染 祀りから沖繩へ                                     | 11.09.14 - 11.10.30 |                                  |
| 工房まる作品展 まる。てん                                       | 11.11.02 - 12.01.09 |                                  |
| 青木豊展 外の部屋、中の庭                                       | 12.01.12 - 12.02.26 |                                  |
| 熊谷有展 家族の肖像  | 12.02.29 - 12.04.22 |                                  |

| [ 展覧会名 ]                      | [ 会期 ]              | [ 九州ゆかりの出演作家など ]                            |
|-------------------------------|---------------------|---|
| 熊本アーティスト・インデックス Scene 2       | 12.04.25 - 12.06.24 | 池田陽一、田中裕子、野田竜太郎、森英顕、澤村武山                    |
| ATOKATA by KISHIN (篠山紀信展第2会場) | 12.06.30 - 12.09.17 |   |
| 祝CAMK10周年!九州アート全員集合           | 12.09.22 - 12.11.18 | 田中千智、永山真策、国本泰英、VAROC、しまうちみか、宮城壮一郎、宮内裕賀、儀間朝龍 |
| くまもとアートポリス25周年展覧会 最新15の建築力    | 12.11.23 - 12.12.24 |   |
| CAMKコレクション展                   | 12.12.27 - 13.02.11 |   |
| 熊本市中学校造形展                     | 13.02.16 - 13.03.03 |   |
| 熊本の作家7 三浦洋一展                  | 13.03.06 - 13.05.06 |   |
| 神野大光展 書と篆刻の世界                 | 13.05.11 - 13.07.06 |   |
| コード・ヨーコ展 キオクの森から              | 13.07.10 - 13.09.08 |   |
| 相撲生人形と熊本の祭り                   | 13.09.11 - 13.10.06 |   |
| 鉄魂ブギ 藤本高廣のくず鉄魂                | 13.10.12 - 13.12.08 |   |
| 熊本市現代美術館コレクション展 開かれゆく境界       | 13.12.14 - 14.02.02 |   |
| 熊本市中学校造形展                     | 14.02.08 - 14.02.23 |   |
| 秀島由己男 創造と探究の生者                | 14.02.27 - 14.06.08 |   |
| こみねゆら絵本原画展                    | 14.06.11 - 14.09.14 |   |
| 熊本市現代美術館コレクション展 舞台へ上がれ!!      | 14.09.17 - 14.11.16 |   |
| パーブルーム大学II                    | 14.11.22 - 15.02.08 | 坂本夏子 ほか                                     |
| Flowers 熊本市現代美術館コレクションより      | 15.02.14 - 15.03.27 |   |
| 熊本市現代美術館 春のコレクション展 自然/抽象      | 15.03.29 - 15.05.10 |   |
| 吉山安彦展 ここから                    | 15.05.13 - 15.07.12 |   |
| チームラボ お絵描き水族館                 | 15.07.18 - 15.08.02 |   |
| アーティスト・インデックス Scene 3         | 15.08.08 - 15.10.12 | 川嶋久美、小林駄々、宮本華子、福永ポンド                        |
| 相撲生人形と押絵展<br>「西国三十三所観世音靈験記」   | 15.10.16 - 15.11.23 |   |
| 熊本の華人展 vol.11                 | 15.11.27 - 15.11.30 |   |
| 江上茂雄展                         | 15.12.05 - 16.02.14 |   |
| 淀川テクニク ゴミニケーション in 熊本!!       | 16.02.19 - 16.04.14 |   |
| クマモト・カラフル<br>熊本市現代美術館コレクションより | 16.06.15 - 16.07.08 |   |
| 丸尾三兄弟 ○○(マルオ)の食卓              | 16.07.16 - 16.09.11 | 金澤佑哉、金澤宏紀、金澤尚直                              |
| 伊藤有紀恵展 カラーラブポップ               | 16.09.14 - 16.11.07 |   |

|  |                     |   |
|--|---------------------|---|
| 熊本市現代美術館所蔵作品より<br>被災作品公開コンディションチェック展                       | 16.11.09 - 16.11.27 |   |
| 熊本市現代美術館コレクション展<br>形が変わることで見えるもの(見えないもの)                   | 16.11.30 - 17.02.26 |   |
| 3.11→4.14・16<br>アート・建築・デザインでつながる東北⇄熊本                      | 17.03.01 - 17.04.30 |   |
| 熊本市被災文化財のいま  | 17.05.04 - 17.07.02 |   |
| 有田巧 熊本日々   | 17.07.05 - 17.08.27 |   |
| 風を待たずに ― 村上慧、牛嶋均、坂口恭平の実践                                   | 17.08.30 - 17.11.12 |   |
| くまもとアートポリス みんなの家の展覧会                                       | 17.11.17 - 18.01.08 |   |
| arthorymen 2005-2018 展                                     | 18.01.13 - 18.03.11 |   |
| 熊本地震復興支援企画 丸沼芸術の森所蔵<br>アンドリュウ・ワイエス水彩画・素描展                  | 18.03.24 - 18.05.06 |   |
| 熊本市現代美術館所蔵作品より<br>被災作品公開コンディションチェック展〔第2回〕                  | 18.05.09 - 18.06.10 |   |
| 熊本アートパレード名品展<br>アートパレード・パレード                               | 18.06.13 - 18.08.12 | 角軍亀、岡松トモキ、永田順子、荒木宣男、河野基春、三藤有希子、ギャバ釘本、光武美沙希、福島房雄、佐伯勝利、一村謙三、かるろす、堀川仁彦、野田ちか子 |
| 本と人と作品の空間を考える01<br>ねじれたライブラリールーム                           | 18.08.15 - 18.09.17 | 松延総司  |
| DDプレゼンツ 中国ITと若者文化のいま<br>シェアサイクルからネットタレントまで                 | 18.09.22 - 18.11.25 |   |
| PROJECT H<br>いろんなじじょう                                      | 18.01.28 - 19.02.11 | 岡崎友則、河野靖弘、春高壽人、宮崎智文、中村圭太、井下悠、杉村武則、福永功太郎、ワビサビ                              |
| 田中栄一展 太古の鼓動  | 19.02.14 - 19.04.21 |   |
| 浦川大志&名もなき実昌 二人展<br>終わるまで終わらないよ                             | 19.04.24 - 19.07.07 |   |
| 本と人と作品の空間を考える03 新しい古本                                      | 19.07.10 - 19.08.25 | 山下陽光  |
| 田中智之の解体新書展   | 19.08.28 - 19.10.27 |   |
| My Name is Tokyo Kai and I am an Artoholic<br>甲斐寿紀雄コレクション展 | 19.10.30 - 20.01.23 |   |
| 熊本市現代美術館所蔵作品より<br>被災作品 公開コンディションチェック展〔第3回〕                 | 20.01.25 - 20.02.16 |   |
| 高浜寛のマンガに登場するアイテムで読み解く19世紀末<br>『ニュクスの角灯』『蝶のみちゆき』…展          | 20.02.22 - 20.04.26 |   |
| 川野美華展 Nighthawks   | 20.05.21 - 20.08.30 |   |
| モヒカンボジェット 世界でたったひとつをつくる                                    | 20.07.11 - 20.08.30 |   |

| [ 展覧会名 ]                                   | [ 会期 ]            | [ 出展作家など ] |
|--|-------------------|------------|
| コーダ・ヨーコ原画展 どうぶつえんのどうぶつたち                   | 20.09.02-20.10.25 |            |
| 熊本市現代美術館所蔵作品より<br>被災作品 公開コンディションチェック展〔第4回〕 | 20.11.01-21.01.17 |            |
| 豊田有希写真展 あめつちのことづて                          | 21.01.20-21.04.04 |            |

熊本市現代美術館の小企画展示室であるギャラリーⅢでは、これまでに138本の企画展を開催してきた\*。「九州・熊本ゆかりのアーティストを応援するスペース」として、各学芸員が担当し企画を実施してきた。九州・熊本で活躍する同時代作家の展示のほか、「熊本の作家」展のシリーズといった収蔵作品からの特集企画、また報道写真、アートボリス、いけばなや盆栽、シルバー文化作品展といった地元の文化関連団体との協働企画等も行ってきた。

2008年以降は、各学芸員が企画の中心になったこともあり、九州・熊本ゆかりの若手作家の個展の割合が増加してきている。また2016年の熊本地震をきっかけに、収蔵品の状態確認を公開で行う「被災作品コンディションチェック展」の試みも継続的に実施している。そのほか、ギャラリーⅢにおいても、様々な団体との協働がより自然な形で行われるようになった。

\*2002年10月12日～2021年3月31日までの期間

段々降りてゆく ―九州の地に根を張る7組の表現者

In Search of Origins: Art Practices Rooted in the Environments of Kyushu

[ 展覧会 ]

会 期：2021年3月27日(土)～6月13日(日)

会 場：熊本市現代美術館

主 催：熊本市現代美術館 [熊本市・公益財団法人 熊本市美術文化振興財団]、熊本日日新聞社

助 成：一般財団法人地域創造

展示協賛：FLAT LABO

後 援：熊本県、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本県文化協会、熊本県美術家連盟、熊本国際観光コンベンション協会、NHK熊本放送局、J:COM、エフエム熊本、FM791

企 画：佐々木玄太郎 (熊本市現代美術館学芸員)

展覧会担当：佐々木玄太郎 (学芸員)、坂本顕子 (教育事業班主査/学芸員)、丸吉ゆかり (学芸アシスタント)、市下純子 (学芸アシスタント)、岩崎千夏 (事務局次長)、岡田直幸 (総務主事)、中川裕美 (総務アシスタント)

会場施工：フジ企画

映 像・音 響：AIRASシステム

広報物デザイン：橋本典 (ピアフデザイン)

[ Exhibition ]

Term : March 27—June 13, 2021

Venue : Contemporary Art Museum, Kumamoto

Organizer : Contemporary Art Museum, Kumamoto (Kumamoto City and Kumamoto Art and Culture Promotion Foundation), Kumamoto Nichinichi Press

Grant : Japan Foundation for Regional Art-Activities

Display Sponsor : FLAT LABO

Support : Kumamoto Prefecture, Kumamoto Prefectural Board of Education, Kumamoto City Board of Education, Kumamoto Ken Bunka Kyokai (Cultural Association of Kumamoto), Kumamoto Ken Bijutsuka Renmei (Artist's Union of Kumamoto), Kumamoto International Convention and Tourism Bureau, J:COM, FM-Kumamoto, FM791

Curator : SASAKI Gentaro (Contemporary Art Museum, Kumamoto)

Vice-curator : SAKAMOTO Akiko (Contemporary Art Museum, Kumamoto)

Curatorial Assistant : MARUYOSHI Yukari, ICHISHITA Junko (Contemporary Art Museum, Kumamoto)

General Affairs : IWASAKI Chika, OKADA Naoyuki, NAKAGAWA Hiromi (Contemporary Art Museum, Kumamoto)

Construction : FUJI Kikaku

Audio-Visual Engineering : AIRAS System

Visual Design : HASHIMOTO Tsukasa (piaf design)

[ カタログ ① ]

発 行 者：熊本市現代美術館

編 集：佐々木玄太郎、坂本顕子、橋本典

編集補助：丸吉ゆかり、市下純子

和文英訳：ベンジャー桂、佐々木玄太郎

デザイン：橋本典

印 刷：さかき印刷

発 行：2021年5月

©2021 著者 \*許可のない転載、複製を禁止します。

[ Catalogue 1 ]

Published by : Contemporary Art Museum, Kumamoto

Edited by : SASAKI Gentaro, SAKAMOTO Akiko, HASHIMOTO Tsukasa

Editorial Support : MARUYOSHI Yukari, ICHISHITA Junko

Japanese-English Translation : Kei BENDER, SASAKI Gentaro

Design : HASHIMOTO Tsukasa

Printed by : Sakaki Printing Inc.

First Edition : May, 2021

©2021 The Authors All Rights Reserved